

OKFA テクニカルレポート 2024

U12 サッカーリーグ in 北海道 道東ブロック オホーツク地区リーグ 2024

代表決定戦 プレーオフ

場所: 津別町総合運動公園サッカー場

報告者 菊池 豪・寺田幸太郎

日付: 2024年9月8日(日)

大会概要

・リーグ形式 (3ステージ制)

第1ステージ... 「斜網エリア」「北見エリア」「遠紋エリア」に分かれ、順位を決定する

第2ステージ... 第1ステージの結果に基づき振り分けられた3グループでのリーグ戦

第3ステージ... 第2ステージの結果に基づき振り分けられた3部制でのリーグ戦

トップリーグの上位3チームがオホーツク代表として、道東ブロック大会進出

・試合時間 40分(20分ハーフ)

対戦カード

第3ステージ

北見リトルウィングス SFT サッカー少年団 vs 美幌 UFO サッカースポーツ少年団 A

前半 0 - 2

後半 0 - 3

TOTAL 0 - 5

遠軽はやぶさサッカースポーツ少年団 U12 vs 美幌 UFO サッカースポーツ少年団 A

前半 0 - 1

後半 1 - 0

TOTAL 1 - 1

遠軽はやぶさサッカースポーツ少年団 U12 vs 北見リトルウィングス SFT サッカー少年団

前半 1 - 1

後半 0 - 0

TOTAL 1 - 1

【ドリブル】

どのチームも前を向いたときは、ゴールに向かう姿勢が見られ積極的に突破を図っていたり、仲間のサポートを得るために運ぶドリブルを試みる選手が見られ、攻撃に厚みがうまれていた。

【崩し】

トップに楔のボールを入れ、中央突破を図ろうという意図を感じた。ボールを受けたトップの選手は、相手DFの人数や状況に応じて、味方がオーバーラップする時間をつくるために無理に前を向くことなくスクリーンの技術を生かしたプレーが見られた。

【ビルドアップ】

美幌 UFO は、ゴールキック時、むやみにロングボールを蹴らずに、ディフェンスラインからつないで攻撃を組み立てていた。ボールが移動中にポジションをとり、ボールホルダーに対してしっかりとサポートに入り、ボール保持につながっていた。

【粘り強い守備】

中盤の守備において中央のスペースを消しながら、ボールホルダーに対して1stDFを決定しボールを奪う意図が見られた。1stが決定することによって2nd、3rdDFがカバーするプレーが見られた。また最終ラインでスペースを管理し、相手のカウンター攻撃を阻止することができていた。

【GKの関わり】

美幌 UFO の GK は、攻撃が相手コートでプレーしているなか、相手のクリアボールに対して対応できるように自陣のゴールエリアを出て、自チームの最終ラインの間に生まれるスペースの管理を行い、相手のカウンターを受けないかわりが見られた。ただクリアするだけでなく、味方にパスをするなど攻撃の起点となるプレーを多く作り出していた。

【1vs1の対応】

ONの対応において、相手との距離が開きすぎて、自由を奪えておらず、簡単に足をだしてしまい突破されてしまうことがあった。自分の体を相手に当てる距離まで相手に寄せ、ボールを奪いきる技術がもっと必要である。「ボールを奪いに行く」ことを評価し、抜かれた場合は2ndDFのカバーリングに対してコーチングすることが必要と感じる。

【ゴール前の守備】

ペナルティーエリア付近の守備において、ボールホルダーに 1stDF がボールにチャレンジするもの、2ndDF が深さでカバーしてしまい、シュートを打たれ失点する場面が見られた。ゴール前の守備では、ペナルティーエリアよりも下がらず、1stDF の横にポジションをとり、「幅で守る」ことを徹底させたい。エリアに応じた「チャレンジ&カバー」を選手に獲得させたい。

【ドリブル】

自陣でボールを受けた選手でも、目の前の選手をドリブルで抜き去ろうとするもボールを失い、ピンチを招くシーンが多くみられた。また相手の人数が多いにも関わらず、ドリブルでつっこみ、ボールロストするシーンが見られた。ドリブルのスピードが速いがために仲間のサポートが間に合わず孤立する場面が見られた。ドリブルには「突破のドリブル」「運ぶドリブル」「時間を作るドリブル」の 3 つの種類がある。どの場面で必要なドリブルを選手が選択し、実行する力をつけさせていきたい。

【パス&コントロール】

年々ボールを扱う技術に向上が見られるが、右足・左足のキック差が大きく、ぎこちなさが見られる。長年の課題であるが、相手のプレッシャーを強く受けたときに、思うようなプレーができなくなるので更なる「ボールをとめて、蹴る」技術を向上させたい。味方選手を前向きさせるパスをする際、パスをつける足やパススピードに拘りをもたせたい。そのためには、顔があがるよう足元にとめすぎるのではなく、蹴りやすいところにボールを置く技術。相手がボールを奪うために寄せてきた際、ボールをぶらし、ボールを失わない技術。左右差なく両足で 30m から 35m を蹴ることが出来る技術を日常のトレーニングからつけさせていきたい。

【動きながらのテクニック】

パスを受ける際、止まって受けるために相手にインターセプトされるプレーが見られる。ボールホルダーの顔があがり、ボールが蹴れる状況のときに動き出し、動きながらのプレーの質を向上させることが必要である。

【攻撃の厚み】

ボールを奪い、守備から攻撃に切り替わったとき、味方 FW へのパスを入れるもサポートが間に合わず、孤立してしてしまい、ボールをロストするシーンがみられた。攻撃の厚みを増すためにも、ボールを動かし相手の守備を広げ、効果的なパスやドリブルを行うことで攻撃のチャンスを増やすことが出来ると考える。

最後に・・・

今回の TSG については、管内の全チームに関わる成果と課題でもあると思います。これからの指導の参考にしていただくと幸いです。本事業に対して、ご協力いただきました 4 種委員会をはじめ、チーム関係者の皆様に深く感謝申し上げます。 文責) 菊池・寺田